

26期生の皆様ー5

(アリストテレスの4原因論)

高総体、お疲れ様でした。実は高総体の前にこの通信を一つ出そうと思っていたのですが、アイデアがまとまらなくてできませんでした。高総体が終わって、ちょっと虚脱感に陥っているかも知れませんね。早めに気持ちを切り替えてください。気持ちを切り替えるというのはそんなに簡単ではありませんが。こちらは気持ちの切り替えの必要もないので、また淡々と哲学の話の続けさせてもらいます。

何度も言って申し訳ありませんが、学問とは「原因」を探す努力です。哲学も学問ですが、ならばどういう原因を探すのでしょうか。それは「最も根本的な原因」です。その哲学が探求するという「最も根本的な原因」とは何のことかを今回見ていきたいと思います。(本当は、原因と原理という似て非なる二つの概念があるのですが、ここでは原理 **principle** と原因 **cause** を区別せずに、原因という言葉だけを使います)。

哲学という学問は、古代のギリシアで自然に発生しました。それは「この世界は何からできているのだろうか」という疑問に答えようとする試みでした。しかし、考えを進めていくと、だんだんと他にも考えるべきことがあることがわかってきました。最初に哲学を始めた人たちは、世界が何からできているか(材料。哲学的に言う「質料 **matter**」)を突き止めようとしたが、よく考えると、ものは材料だけでなく他の原因も必要としていることに気づきました。

たとえば説明しますと、粘土で皿を作ったとします。それを指さして「これは何」と聞かれたら、君は「粘土」とは答えずに、「皿」と言うでしょう。つまり、あるものが「何か」という問は、その「材料」ではなく、その「形」(哲学的に言う「形相 **form**」)を尋ねているのです。だから、皿が皿であるゆえんは、その皿が粘土でできているからではなく、皿の形を与えられたからなのです。つまり「万物の根源は何か」という問に対して、材料ではなく、皿や家を皿や家に行っている原因は何か、これこそ問わねばならないと気づいたのです。

こういうふうに見点を変えたのが、ピタゴラス派と言われるグループです。ただ、彼らがこう言う点に気がついたのは、宇宙に調和(ハーモニー)があるという事実に注目したからです。そして彼らはそれを「数」と考えました。(「すべては数でできている」という主張の意味ははっきりわからないところがあるようですが)。



次に、世界をよく見ていくと、世界は絶えず変化していることに気がつきます。この事実を強調して「万物は流転する」と言ったのがヘラクレイトス(前544~484年頃)でした。でも、もしすべてがひっきりなしに変化していたら、この世界は何が何だかわからなくなるでしょう。例えば、彗星を考えてみましょう。

「今長崎市の上にある」と言った数秒後には諫早市の上を通過し、その数秒後には大村市の上にある、というふうに「今ここにいる」と言えません。場所の移動は、変化の一種に過ぎません。場所が変わらなくても、そのもの自体は変化します。もし絶えず変化したら、いったいそのものの「真実の姿」はどうなるのでしょうか。だからパルメニデス(前540~470年頃)という人は、「真の存在は不変、不動、唯一、完全なものだ」と言い切った。彼は「あるものはある。ないものはない」ときわめて常識的に見えることを言いましたが、その理論を一貫させて「あるものは変化しない。変化に見えることはまやかしじゃ」と言いましたので、世間の人から「あいつは頭がいかれたんと

ちゃうか」と笑われた。この先生の名譽を挽回しようとしたのがゼノンという弟子で、運動（変化）はないことを証明するために「アキレスとカメ」などのパラドックスを考えたということはいつか授業でみました。

この論争から、「在るものは不変であるはずだが、その不変の存在が他の不変の存在とくっついたり離れたりして変化が起こり、色んなものが生じるのではないか」と、4元素説や原子論が出てきました。また、「ものが自然にくっついたり離れたりはしないから、外の何かはそれらをくっつけたり離したりするはずだ」と言って、くっつけるのが友愛、引き離すのが憎しみだ、とかあるいはすべては理性によって始められたなどと言った人もいました。

（アリストテレスは、これを始動因 **efficiente cause** と呼びます。私たちが原因と言うとき、普通この始動因を指しています）。

しかし、アリストテレスはものが存在するためには、材料（質料）、形（形相）、始動因だけでは不十分と考えました。この三つの他にもう一つの原因がある、と。それは人が何かを制作するときのことを考えたら、わかります。例えば、椅子を作るときのことを考えましょう。君が椅子を作ろうとするとき、まず完成された椅子を想像し、それに必要な材料を考えて、作り始めるでしょう。しかし、これらの作業をする前に、決定的に必要なことがあります。それはその椅子を作る「目的」です。つまり、「何のために椅子を作るのか」ということがなければ、誰も椅子を作りません。そこでアリストテレスは上述した三つの原因に加えて、目的因 **final cause** という四番目の原因があると教えたのです。この目的因は人工の製品の場合はよくわかりますが、自然のものにもあるのでしょうか。アリストテレスは、自然のものも、いつも決まった仕方で生成消滅することに注目し、ものはそれぞれ決まったコースを進むので、それが完成された状態が、そのものの目的であるとししました。例えば、軽いものは上に上って自分の落ちつく場所に到着することがその目的。動物は成長して、子孫を残す状態になることが自分の目的である、というふうに。

さて、近代になると、学問の知識を人間が感覚（視覚、聴覚など）で捉えられることに限るという傾向が強くなります。これを実証主義 **positivism** と呼びます。これは一見すると、不確実な知識を捨てて確実な知識だけに限ろうとする謙虚な態度に見えますが、実は「我々は多くのことについてわからないのだから、そういう分野のことについては、各自の考えに任せるべきだ」という個人の自由放縦を正当化する態度なのです。近代人は「人間は物体の大きさや形などの物質的な面は知ることができるが、その目的とか価値とかいう感覚では捉えられない面については何も言えない」と言い、アリストテレスの目的因は否定されることになりました。ということで、物理や化学では物体が何からできているか、その性質は何かなどを研究しますが、その目的は何かという問題は相手にされません。しかし、この世界に存在するものに目的があるのかないのかは大問題ではないでしょうか。この問題は自然科学の扱う問題ではなく哲学の課題です。問題は、近代では哲学者がこれを拒否することになったことです。もし哲学が目的や価値について何も言えないなら、哲学をする意味はないと言えるでしょう。これは由々しき問題とは思いませんか。

